



このところ飲み続けている。夜な夜な人がやってきたり、出かけていったりするのだ。ということはやるべきことが多いということでは喜ぶしいのだが、なんだかわけがわからないものも多い。大体、プリキナファソって知ってますか。国の名前なんだそうです。そのプリキの国でどうい援助をするとか、アフリカの1つの国に600箇所くらいあるエイズの診療所のあまりのプライバシーのなさ、それによって迫害される患者をどう守るか、バングラでようやく予定通り出来上がってきた良いうちをどうやって利用させていくか、そのための教科書をどう作るか、さしあたってのわれわれの貧困問題ははどうしてくれるのか(これは私が主張したのだ

が。)、ミシンや井戸の援助をするにはどこから金をせしめてくるのか。など、など、と絶対にもうかりっこない話を酔っ払い延々と続けている。そのうちに、目がとろんとしてくると、「最近空を飛び夢を見ているかあ。」などと話も飛ぶ。「そういえば見るには見るけど、昔みたいに自由に空高く飛びまわるなんてのはないな、どっちかという、地べたすれすれにスウーッと移動するのばかりだな。」「なんか元気がなくなさけないな。」とたそがれ組みは意気があがらない。そうこうしているうちに「そろそろ帰らなくちゃあ。」と協力隊 OB の女性が腰を浮かすが、また引き止められてしまう。なんだか学校の寮にいらしいのだが、そのうちに「うちの男の子たちは元気よー。門限過ぎててもいつも塀を乗り越えて帰ってくるわ。」「で、今日はどうするの。」「何いってんの、私だって協力隊の OB よ、乗り越えるわよ！」と元気がいい。それにしても採点しなければいけない学生たちの答案用紙をズンッと抱えて、まあ、塀の回りにばら撒いていかなければいいがと一心心配してみるが、まあ、それはそれでいいのだ。「遠くまで飛んでいったのから得点をあげれば良い。」などという意見も乱れ飛ぶ。

しかし、なんだか不毛な飲み会も多いな。まあ、その場合は楽しいのだが後から落ち込んだりすると、その場が楽しいだけでいいのだろうかとも思う。何か実りが欲しいのかもしれない。しかし飲むというのは何か理由があるのだろうか。もともと日本の男の標準タイプというものは「ああ。」とか「うん。」とかいう以外ろくにもを話さない。そんな男たちが唯一話せるのは酒の席であった。といっても酒もろくに飲めなかった時代はほとんどだったから、男たちはほとんど話さずに死んでいってしまったはずだし、男と話せないから女たちは群れて話しまわる。そういう仕組みであったはずだ。

ところがこのところ町のどんな隅に漂って行っても、懐の豊かな人から貧乏人まですぐに飲み屋につきあたってしまい、年寄りも愚痴をいい、女は悪口を叫び、若い男はやたらとキヤキヤ吠えたり泣いたりする動物園と化して時間の許す限りグラスを空にしていくというだけの味気ない場に変わって行ってしまった。わたくしは、本当は静かに飲みたいのです。せいぜい4人どまりで、考えたり話したりしながら、言葉のやり取りを楽しんで、おだやかにゆっくり酒をすすっていたいのです。飲んだ後で「今日もまた時間をうっちゃったなあ。」などと思いたくもないのです。そんな数少ないときを過ごした後はなんだか生きていて良かったなどとしみじみ思ったりするのですが、どういわけか、気がつくたくさんの人の中で「ワー」とか「キヤ」と言っていたりする。まことに困ったことで、これはやっぱり「時代」というものがいけないんじゃないかとつくづく思う。仕方がないからまあ、今夜あたりまた両国駅前が一番安い飲み屋にでも出撃して行って、「時代」というものについてじっくりと話してこなければなるまい。しかしなんだな「時代が何だ、時代ごときが怖くて酒が飲めるか。」などと荒れそうな気もするな。理想ははるかなだ。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX03-5600-0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com